

マイブウ・メーノス (まあーまあー)の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久 記

### 第34話ー鍵の世界

約40年前(1973年)にブラジルに来て、初めて働き始めた日本人(移民の方)の小さな会社、朝、社長さん自ら会社のシャッターを開けるのですが、その時の鍵の大きさと数には驚いた、キーホルダーなんていうものではない、映画に出てくる刑務所の独房の鍵をぶら下げよう鉄輪に、ザクザク、ジャリジャリ音を立てて鍵を見つけシャッターを開けていく、それも一つのシャッターに三の鍵、そして次に、事務所(すなわち会社)入り口の扉、ここは二つ、それから社長室の鍵、奥に行くと、工場入り口、食堂、製造事務所と次から次へ驚きました。そして、仕事場でもそうです、事務机、ロッカー、引き出し等々、すべてに鍵がかけてある。一般家庭の家もその通り、扉の扉、玄関のドア常に鍵がかかっている。すばらしい鍵の世界です。「相手をみたら泥棒と思い」、「自分物は自分で守れ」が染みついている光景には驚きました。また当時、鍵の数はその人のステータスを表すと云われ、腰にこれ見よがしに鍵の束をぶら下げて歩く人の多いこと。

日本では、家に入ったら、襖で仕切られた部屋、まず鍵は必要ない。仕事場、たしかロッカーの鍵だけで、事務机には鍵など掛けなかった。鍵は財布の中に1個入っているだけの生活習慣の世界から来たばかりで、驚いたものである。

それから、サンパウロ郊外の町で一軒家に住むことになったのですが、玄関のドアには鉄格子のような棧の内側にガラス、各部屋の窓と云う窓には、外側から、それこそ刑務所のような鉄格子がしっかりとついている。侵入者防止(泥棒よけ)である。初めは、情けなくなったが、地元の話しや、ニュースを聞いて、これは必要最低限の自己防衛手段と解りはじめ、時間とともに馴れてしまった。この町で私は2度車を盗まれました、小さな家でしたので駐車場がなく、路上駐車です、朝起きて、「あれ、昨日どこに車と停つけ、こっち、いやあっち、え！ ない！ やられた！ 盗まれた！」頭から血の気が引いていく、1度はサンパウロのビラ・マリアで衝突事故、泥棒は逃げ、車は警察からの連絡で戻ってきた。2度目は、ドゥットラ街道でガス切れで放置されて発見された。

情けなくなりました。

サンパウロからマナウスに移った時、サンパウロと違って、鉄格子のような窓格子を付けている家が少なく、ここは安全で平和な町と感じた。実際、サンパウロでは家内が3回、私が1回トロンバジーニュー(ひったくり)に会っており、昼も夜も前後、左右注意をしながら歩き、あぶないと思ったら、どこかに逃げる準備をして歩いたものであるが、ここは平和、何の心配もなく歩けた。

それも、数年が過ぎると、大都会と同じように、地方から人が流れ込み、泥棒、強盗、はては誘拐事件まで発生するようになり、頑丈な窓格子と鍵の世界に入ってしまった。一度は家で庭掃除をしていると、20歳前後の男が、紙の靴箱を持って、「センニョール、ナウンケール、エステ？」と箱の蓋を開けた、中には拳銃が入っていた、ビックリ、リボルバー式でかなり大型だったので38口径だったと思われる。断りましたが、このような売買があるのかと体験した次第です。

鍵の世界で注意したいのが、職場の事務机です、昔ですと計算機が、今はデジタルカメラが、財布からお金が無くなった(盗まれた)という話は日常茶飯事です、昼の食事時間、夜から朝にかけて無くなる、最悪は、机に入れてあった小切手の数枚がすり抜かれ、サインを真似られて口座からお金が引き出されたという事件まであった、金額が小口だったので、銀行も不振に思わずお金を渡していた。特に日本から来られた方は、事務机の上に無造作になんでも置いておく習慣がある、珍しい、お金になりそう、「私じゃない、置いておく方が悪い」で無くなってしまふ。財布、腕時計、カメラ、計算機、可愛い文房具や工具等々要注意です。

—次号第31話に続く—